

# 地蔵関連地獄説話：『今昔物語集』から 『一四卷本地蔵菩薩靈驗記』への変容\*

李市竣\*\*

(e-mail : sjlee@ssu.ac.kr)

---

## 目 次

---

1. 序論
  2. 『今昔』以前の地蔵関連地獄説話
  3. 『今昔』の地蔵関連地獄説話
  4. 『今昔』と『一四卷本地蔵菩薩靈驗記』との比較
  5. 結論
- 
- 

## 1.序論

日本説話文学上、地蔵菩薩に関する説話が集中的に現れるのは、十一世紀前半、三井寺（園城寺）の上座・実睿編の『地蔵菩薩靈驗記』（以下『原撰本靈驗記』と略す）からである。『原撰本靈驗記』は早く散逸し、漢文体表記だったと想定される。それを典拠としたと言われる十二世紀前半に成立した『今昔物語集』であり、卷十七に多数の地蔵説話が収録されている。一方、江戸時代に入って、貞享元年(1684)『十四卷本地蔵菩薩靈驗記』が出版される。1)天竺・唐土を含む三国の地蔵説話よりなっており、中世から近世にかけて出た地蔵菩薩の説話集・縁起集の集大成として『今昔物語

---

\* 本研究は崇実大学校内研究費によって作成されたものである。

\*\* 崇実大学校日語日本学科

1) 『地蔵菩薩靈驗記』は日本の地蔵説話を網羅したもっとも重要な説話集であるにも関わらず、研究は 眞鍋廣濟などの書誌学的な一連の論があるのみ。近年、簡単な注釋と出典関係を調べた榎本千賀 [ほか]編著『一四卷本地蔵菩薩靈驗記 上』（三弥井書店、2002、4）、『一四卷本地蔵菩薩靈驗記下』（三弥井書店、2003、8）が出版され、ようやく研究の出発点となった。

集』との共通話が多く、『今昔』の出典に目されたが、直接の関係でなく兄弟関係にあると推定される。<sup>2)</sup>筆者はここ数年、日本の地獄説話を通時的に研究しており、本稿はその一連の作業の一つである。本稿の目的は、

『今昔』巻十七に所収された地蔵関連地獄説話の特徴を明らかにし、また、後代に成立した『靈驗記』の同話との比較を通じて地獄観の変遷の一端を探ることにある。

## 2、『今昔』以前の地蔵関連地獄説話

本節では、『今昔』の地蔵説話の考察に入る前に、先行の説話集の『日本靈異記』の地蔵関連地獄説話について調べることにしたい。『日本靈異記』には多数の、地獄から現世に戻る蘇生譚が所収されているが、地蔵が登場するのは下9「閻羅王奇しき表を元し人を勧めて善を修はしむる縁」の一篇のみである。藤原広足なる男が閻魔王に会う話であり、内容を要約すると以下のようである。

藤原広足は病にかかったので療養のため神護景雲2年2月17日に大和の国の山寺に入り、戒を持していた。筆を持って机に向かったまま動かないので、侍者の男が、眠っていると思って揺り動かして「日暮れになったので、仏に礼拝するときです」と言って起こそうとした。広足は手に持った筆を取り落とし、倒れ、息も止まっていた。侍者の男は驚いて家に帰り、親族のものに知らせた。殯の準備をしていると、3日目に蘇生した。広足が語るに、頬髭が逆さまに生えて、赤い衣服を下に着て武装した人がきて、閻魔王庁が急にお前を呼び出した、といて、前に一人うしろに二人の間に自分をはさんで連れていかれた。自分は、追い立てられ走って行った。道がとぎれ、深い河に出た。水は黒ずんでいて流れはなく、深くて静まりかえていた。自分は木を倒してわたそうとしたが、到底とどかない。前に立つ人が、お前は水の中に入って俺の跡をよくついてこい、という。そのようにして河を渡った。行く手に屋根が幾重にも重なった楼閣があった。光り輝いていた。玉すだれのなかに人がいるが、顔は分からない。使いの者が、召して来ました、と報告する。すだれを動かして声がして、お前の後ろの人物を知っているか、とたずねる。見ると、妊娠中に死んだ広足の妻であった。また声がして、その女が嘆き訴えるのでお前を召したのだ、女は6年の刑のうち半分しか済ましていないが、お前の子を孕んで死んだのだから残りの3年はお前とともに刑の苦しみを受けたい、と言っている。広足は、それではこの女のために法華経を書写し講読し供養し、受けている苦しみを救います、といった。妻は、本当にそうしてくれるのなら、すぐ許して帰しましょう、といった。広足は門のところまで行ったところで、自分を召した人が誰だったのか知りたいと思い、引き返して、お名前を知りたいとおもいます、と尋ねた。すると声がして、自分は閻羅王である、お前の国で地蔵菩薩というのは自分のことだ、といった。そして、簾の中から右手を出して広足のうなじを撫でて、印点をつ

2) 拙論「『十四卷本 地蔵菩薩靈驗記』의 설화전승의 방법에 대한 연구~『今昔物語集』와의 비교를 통해서~」(『日本文化研究 第28輯』동아시아일본학회, 2008: 10)参照。

けてやったから災いには逢わない、速やかに還れ、と言った。その指の太さは十抱えもあった。広足はこう語りおえると、死んだ妻のために法華經を書写し供養し、その地獄での苦しみをあがなってやった。

日本において、閻魔王(閻羅王)と地藏菩薩が同一であるという内容<sup>3)</sup>は『靈異記』下9が初見である。これは『十輪經』(序品)に見る「あるいは閻魔王見を為し、あるいは地獄の卒見をなし、あるいは地獄の諸の有情身をなし」の記事を踏まえたものであろう。平安時代、早い段階から閻魔王が地藏菩薩として理解されているのが分かる。<sup>4)</sup>

さて、ここで注目すべきは地藏の地獄での役割に関してである。この点について、すでに、杉岡敦志は「この話に登場する地藏は、こうした現世利益の方面からしか描かれておらず、平安末期の地獄信仰にみられるような地獄抜苦の側面は持ち合わせていない。また広足の妻は法華經の書写と読誦供養によって責苦から救われるのであり、地藏の救済によるものではないのである。」と指摘している。<sup>5)</sup>『地藏十輪經』『地藏本願經』『占察善惡業報經』が地藏三經といわれ、『十輪經』『本願經』には、地藏は釈迦入滅後弥勒が出現するまで56億7千万年の間、六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天)輪廻する衆生を救う任を持つという「地獄抜苦の側面」が強調されている。これらの三つの地藏經典は「正倉院文書」の記録によると、各々天平5年(731)、天平10年(738)、天平8年(736)以降に書写されている。しかし、經典が書写されてからその信仰がすぐ定着し隆盛するわけではない。撰関時代以前の律令時代までの地藏の造像は、阿弥陀、観音、弥勒などに比較して非常に少ないことが上記の点を雄弁に物語る。また、初期の仏像が虚空蔵菩薩像と対となっている点から、当時の地藏信仰は来世的な側面よりは現世利益的側面が強かったろうと判断される。<sup>6)</sup>これに関して、速水侑は、

3) 原文は以下のようである。

「即ち我を召せる人を知らむと念欲ひて、更に還りて白さく『御名を知らむと欲ふ』とまをす。爰に告りたまはく『我を知らむと欲はば、我は閻羅王、汝が国に地藏菩薩と称ふ、是れなり』とのたまふ。

4) 日本では鎌倉時代以降の偽撰だとされている『地藏菩薩発心因縁十王經(通称『地藏十王經』)』が編集されて、冥途に於ける十王並びに地藏菩薩の発心の因縁を説かれ、閻魔王は冥途十王の第五王で、本地は地藏菩薩と説かれている。『地藏十王經』における閻魔王に関しては、石田瑞磨『日本人と地獄』(春秋社、1998)、pp83-88を参照されたい。参考までに、鎌倉以後、念仏専修の思想が地藏思想を吸収する形で「阿弥陀=地藏」同体説が現れる。例えば、親鸞聖人は『浄土和讃』(『浄土真宗聖典』575p)で「南無阿弥陀仏をとふれば 炎魔王王尊敬す 五道の冥官みなとも によるひるつねにまもるなり」といって、阿弥陀仏が閻魔王や他の冥界の官吏に対して、影響力を発揮することを説く。さらに、本願寺三世の覚如上人の実子である存覚上人(1290~1373)によって著された『諸神本懐集』(1324年成立)によれば、「地藏菩薩は、地藏・法蔵、同体異名なり。地藏と弥陀と、もとより同体なるがゆへに、弥陀の名号をとなへば、かの御ころにかなはんこと、うたがひなし。」(『日本思想大系』「中世神道論」とされる。「法蔵」とは、「法蔵菩薩」のことであり阿弥陀仏の前身であるとされている。存覚上人は、その阿弥陀仏の前身と地藏菩薩とが同体異名であると定めることによって、地藏の本願は阿弥陀の本願に通ずるものであるというのである。

5) 杉岡敦志「『日本靈異記』における地獄説話と地藏」(『仏教民俗研究 第4号』、仏教民俗研究会、1975・5) p.28

奈良から平安初期の地蔵信仰の不振と、このような地蔵の現世利益的での受容とは、きりはなせない、うらおもての関係にあるのだろう。六道ことに地蔵抜苦に最大の特徴がある地蔵信仰は、悲観的来世的な信仰が未発達なこの時代には、貴族たちの関心をよばず、わずかに、その現世利益的側面で、当時盛んだった虚空蔵菩薩信仰と対の形でうけいられていた。

と指摘する。7)『日本霊異記』には多数の地獄蘇生譚が収録されているにも関わらず、地蔵が登場するのは下9のみであり、平安末期の地蔵信仰に見られるような地獄抜苦の性格は見受けられない。現世利益信仰が仏教の主流を占め、来世の六道輪廻の恐怖がそれほど深まっていなかった当時、この話は初期地蔵信仰の性格を調べる際に示唆する所多いといえよう。

### 3. 『今昔』の地蔵関連地獄説話

本節では『今昔』地蔵関連地獄説話の特徴について、話型とモチーフを中心に考察する。対象になる話は地蔵説話を網羅した『今昔』十七の計32話中、地獄と関連する14話である。

まず、話型に関してであるが、地獄蘇生譚が計12話、地獄巡礼譚が計2話となっている。8)前者は、僧蔵満は三十歳で死に、地獄の使いに捕らえられるが、日頃信仰してい

---

6) 文献上確認できる最古の仏像として、「東大寺要録」には天平十九年(747)二月十五日に光明皇后発願による、高さ一丈の地蔵菩薩像と虚空蔵菩薩像が一具の像として東大寺講堂に安置されたと記されている。一方、現存する最古の仏像とされているものは京都、広隆寺の地蔵菩薩座像であって、貞観十五年(873)、勘録「広隆寺縁起并資財帳」に広隆寺別当道昌(798~875)発願と記録されている。これまた虚空蔵菩薩像と対となっている。当時の虚空蔵菩薩信仰は自然智(=記憶力)を得るための求聞持法を中心とした現世利益的側面が強かった。

7) 速水侑『地蔵信仰』(塙書房、1975) p.42

8) 地獄説話の分類は諸者によって細部においては若干異見があるものの、筆者はたいい以下の七つの分類を試みる。A 地獄に入って再び現世に戻る話として、A-1 地獄に入って、何らかの事情で現世へ帰還する話。「地獄蘇生譚」 A-2 生者のままで地獄に入って、帰還する話。「地獄巡礼譚」 A-3 生者のままで地獄と現世を往来する話。「地獄往来譚」さらに、B 現世で地獄を経験する話として、B-1 現世で地獄の責苦を経験する話。「地獄現報譚」 B-2 生者のもとに地獄の者が亡霊として出現する話。「亡霊出現譚」 B-3 生者のもとに地獄の使臣が出現する話。「地獄使臣譚」 B-4 地獄が来迎する話。「地獄来迎譚」などである。\*地獄往来譚：『冥報記』下25(河東県令の柳智感が閻魔王の指示で臨時冥官として三年間現世と冥界を往来する)。地獄の書記官などの任務を与えられる例は『冥報記』中19と下15に見える。一方、日本には大江匡房の『江談抄』三39と『今昔』二十45に小野篁の地獄往来譚がある。\*地獄来迎譚：『極楽記』19と『宝物集』、『今昔物語集』(十五10.十五47)。『冥報記』にない話型。源流は迦才の『浄土論』第六引現得往生人相貌の「優婆塞得往生者五人」だと比定される。\*地獄巡礼譚：『冥報記』中1(泰山府君)『法華験記』下124(立山地獄説話)『冥報記』中1：ある僧が太山廟(泰山府君

た地蔵の化身である小僧に救われ、蘇生する話 (17)などが属し、後者は、京都の七条辺りの富裕な一家の娘が越中の立山地獄におちていたのを、彼の女の父兄が3尺の地蔵菩薩の像をつくり、また法華經を書写したことの功德によって救われたという話(27)などがこれに属する。参考までに『今昔』以前の地獄関連説話の話型と比較してみると、以下のようになる。

	總計	地獄蘇生譚	地獄巡禮譚	地獄往來譚	地獄現報譚	亡靈出現譚	地獄使臣譚	地獄來迎譚
『冥報記』	總56話 中 22話	上2、中4・8・12・15・18・19、下3・4・15・19・23・24 /計13話	中1/計1話	下 25/計1話	下8/計1話	中7・11、下7・20 /計4話	中 14、下 12 /計2話	
『靈異記』	總 116話 中 17話	上30、中5・7・16・19・25、下9・22・23・26・35・37 /計12話			上 11・27、中 10 /計3話	下 36 /計1話	中 24 /計1話	
『極樂記』	總40話 中 2話	2 /計1話						19 /計1話
『法華驗記』	總 128話 中 6話	上8・28・32、中 70、下97 /計5話	下124 /計1話					
『今昔』	總32話 中 14話	十七17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・28・29 /計12話	十七27・31 /計2話					

この表で分かるように、『今昔』の地蔵関連地獄説話の話型は先行する説話集のそれとほとんど変わらない。計12話の地獄蘇生譚は、前代の地獄蘇生譚と同じく、死、夢、病氣などが前提となって、死者は地獄の獄卒に導かれ地獄に入り、閻魔王と対面するが、平素の功德によって現世へ戻る、という構成となっている。また、計2話の地獄巡禮譚も『法華驗記』下124の立山地獄説話の構成とまったく一致している。『今昔』巻十七の地蔵説話は前代の地獄蘇生譚、地獄巡禮譚の形式を借りて、中身を地蔵の功德の内容

の廟)で神に会う。神は僧の同学が太山の獄で苦痛を受ける光景を見せる。同学を救うためには法華經の書写をしなければならぬ。僧は法華經を書写し、その功德で同学は他の所に転生する。

にすり替えたものとして成り立った靈驗譚であるといえよう。

では、なぜこのような地獄抜苦の地蔵信仰が、この時代、厳密には実睿編の『地蔵菩薩靈驗記』が成立された十一世紀前半に具体的に現れたのであろうか。速水侑はこれに関して「わが国の来世的地蔵信仰は、一つには中国仏教の動向に刺激され、また一つには摂関貴族社会の変動による六道輪廻思想の発達を背景に、形成されたのであり、そうした六道抜苦的地蔵信仰の片鱗は、九世紀末にうかがえるとはいえ、源信を中心とする念仏結社運動が昂揚する十世紀後半になって、ようやく貴族社会仏教の中に、その姿を明らかに示しはじめるのである。」と指摘する。<sup>9)</sup>氏の指摘は、律令時代の楽天的な気運から打って変わった、藤原摂関家の独裁に疎外された中下貴族の間で芽生えた現世否定の思想と六道輪廻の深化による地獄への恐怖、来世の浄土を目指す源信を中心とする念仏結社運動に注目しており、示唆する所多い。律令時代の貴族には、世の中を儚ないものと見る陰気な浄土系はあまり人気がなかったようだ。死んでからの話より、今の現実的なご利益に重きが置かれたのであろう。でも、その後律令体制が崩れてくると、没落する貴族も多くなり、宿世観や無常観、六道輪廻の思想がなじんできた。私的な来世の救いをテーマとする浄土思想の興隆と相まって、地蔵信仰は来世的性格を強めることになったのである。

一方、細かいモチーフの内容に入ると、注目すべき二、三点の変化も見受けられる。

第一に、先行する説話集では、地獄の位置が現世と連続的な空間として捉えられる、すなわち、水平他界観が多かったが、『今昔』では、地獄の所在を地下に求める話が見える。たとえば、十七19の淨照は「暗キノ穴有り。(中略)穴ニ落入ル間、風極テ猛クシテ、二ノ手ヲ以テ自ラ目ニ覆フ。而ル間、遥ニ墮テ、閻魔ノ庁ニ至リ」、十七22の盛孝は「大ナル穴ニ入テ、頭ヲ逆サマニ墮下」ったのである。ようやく経典などでいう、地獄は地下にあるとの旨と合致する例が登場したわけである。日本説話文学の中で地獄を垂直的空間に捉えたのもっとも早い例として注目に値する。

第二に、先行する説話集では、閻魔王が裁判官としての権威が強調されるが、地蔵説話ではその権威が薄れ、専ら地蔵の地獄抜苦の功德が強調される。地獄蘇生譚のほとんどに地蔵による冥管などへの訴願の場面があって、地獄が墮地獄者の弁護人として大きな力を発揮していることが分かる。渡浩一の調べによると、本人以外の者による訴願によって蘇生するという話は、『今昔』本朝仏法部の中に地蔵関連説話以外に4話に過ぎないという。<sup>10)</sup>その4話のうち2話が観音であるが、観音信仰と比較した際、地蔵信仰における地獄抜苦の功德がどれほどこの時代に強調されたかを容易に推測できよう。

第三に、先行する説話集では、墮地獄の理由が比較的明記されているが、地蔵説話

9) 『地蔵信仰』(塙書房、1975) p.58

10) 観音の化身(十三35)、観音の使者(十六36)、放生した生類の化身(二十15)、小野篁(二十45)などである。渡浩一「平安末期の地蔵信仰の構造——民間地蔵信仰の一考察(下)——」(『仏教民俗研究 第5号』、仏教民俗研究会、1980・3) p.20

では墮地獄の理由が不明であるか、あるいは善業を積んだ人さへも地獄に墮ちる場合が多い。例えば、『日本靈異記』には、地獄と接する理由として、詐欺・横領・収奪(上27、下22、下23、下35)、殺生など(上30、中5、中10)、悪口(中7)、慳貧(中16)、寺の物を破損(下36)、不知因果・悪行(下37)、死(下9)、墮地獄者の要請(上30、下9)、人の代わり(中24、中25)、読誦(中19)などが挙げられており、不明なのはわずか中24、中25、下35、下37などである。それに対して、地蔵説話は、殺生(十七24)、不作善根(十七27)、無慙破戒(十七31)の以外には墮地獄の罪が明記されていない。かえって、「一心ニ念仏ヲ唱フ。亦常ニ持齋シテ、日毎ノ晨朝ニ、地蔵菩薩ノ宝号一百八反唱」った蔵満(十七17)、「天性トシテ修験ヲ好テ、諸ノ山ヲ廻リ海ヲ渡テ、難行苦行」した阿清(十七18)などが地獄に墮ち、続いて「法を学ビ行ヲ修テ、遂ニ顕密ノ教ヲ兼テ学」んだ浄照(十七19)、「地蔵菩薩ノ像一体ヲ造テ、其ノ寺ノ内ニ安置シ奉テ、日夜ニ恭敬」した公真(十七20)、「懇ニ人ヲ慈ブ心有テ、生類ヲ殺ス事無シ。凡ソ道心深シテ、毎月ノ二十四日ニハ、必持齋精進ニシテ、仏事ヲ營テ、殊ニ地蔵菩薩ヲ念ジ奉」った賀茂盛孝(十七22)も地獄に墮ちている。では、なぜ地蔵説話では悪行どころか善業を積んだ人たちが地獄へ墮ちてしまうのであろうか。そこで、以下の井上光貞の指摘に注目したい。氏は、地獄観の推移を三期に分けて、まず『靈異記』『験記』に見られる地獄観を「(甲)純蘇生譚の地獄観」と称して、「善因を積めば善果があらわれ、悪因を積めば悪果が生ずるという『靈異記』の楽観的な思想の一環をなすだけのもので、墮地獄もその悪果の一つに過ぎない」と説明し、続いて『今昔』巻十七では「自ら悪業を犯さずとも、前世の悪業の故に、人は生まれながら罪深き身であるが故に地獄に落ちざるをえない」という「『地獄は必定』という深刻な地獄観」があらわれ、それを「地蔵菩薩の救済・本願による慈悲業」に頼るしか救いの道のない「(乙)地蔵型蘇生譚の地獄観」と称して、さらに同じ『今昔』十七27には「もはや蘇生という甘さが全くなく、地獄は必定であるが、地獄を信ずればそこでの苦しみは軽くてすむ」という地獄必定観の徹底した「(丙)純地蔵信仰の地獄観」が見られると指摘している。<sup>11)</sup>地獄観の変化・深化を時代の推移に追って位置づけた氏の説は多いに首肯すべく、特に、「前世の悪業の故に地獄に墮ちる。」(乙)という指摘は、「流転生死ノ業縁ノ引ク所ニ依テ」(十七17)、「中夭ノ業縁ニ被縛テ」(十七18)、「輪廻生死ノ過ガ、輒ク此ヲ免ゼム。…汝前世ノ罪業ニ被引テ」(十七20)、「衆生ノ善悪ノ業、本ヨリ不可転ヌ法也。定メテ此ヲ受ク。而ルニ、此ノ男コ既ニ今度ハ決定ノ業也。」などの記事とびつたりと相応する。『日本靈異記』の時代と『今昔』の時代では「輪廻」や「来世」に対する考え方が変わってきたことである。つまり、善因善果、悪因悪果は現世に限らなくなる。来世、六道の認識が深まるにつれて、前世の因縁も引き受けざるを得なくなってきた。現世で罪を犯さないのに、前世の罪業

11) 井上光貞『新訂 日本浄土教成立史の研究』(山川出版社、一九八九年)二三七頁～二五七頁

で地獄に墮ち、冥路に迷う話が多い。すなわち、「今昔物語」の地蔵説話の地獄観では、人びとは現世の善悪によってではなく前世の業縁により、あらかじめ定められた運命として地獄に召されるのであり、もはや宿命であると考えられた。「地獄は必定」という意識が生まれたのである。

ところで、この「地獄は必定」という意識は、特に貴族階級ではなく民衆において強かったようである。巻十七の地蔵説話の舞台は京に限らずほぼ全国的な分布を見せており、貴族よりも下層民衆が多く登場する。この点に注目して、速水は平安末期の浄土教の諸業往生思想のもとで、多量の功德を積むことができる貴族階級には墮地獄の恐怖はさして切実ではなかったのに対して、諸業往生のすべなき下層の一般民衆は地蔵信仰が発達し、「地獄は必定」という意識が生じたという。12)氏の指摘は、浄土教の庶民への浸透、貴族社会、庶民の両階層における地蔵信仰の不振・隆盛、地蔵信仰の民衆性など、当時の諸様相を考慮に入れた意見として多いに参考になるだろう。

#### 4、『今昔』と『一四卷本地蔵菩薩靈驗記』との比較

『今昔』と『靈驗記』は計31話の共通話を有しているが、『今昔』の地獄関連地蔵説話に対応する『靈驗記』の説話は以下のようである。

『今昔』十七	17	18	19	21	22	23	24	25	26	27	28	29	31
『靈驗記』	二 1 3	一 8	六 5	二 乙	二 9	二 1 2	九 1	一 4	四 4	六 4	六 1 6	十 四 8	一 9

『今昔』と『靈驗記』の両書は直接的な出典関係ではないことは、すでに「序論」で触れた。本節では、両書に収録された同話を比較することによって、平安時代末期の地蔵信仰や地獄観が後世どのように変貌していったのかを考察したい。

まず、両書の相違点として、『靈驗記』の方が『今昔』より地蔵専修の性格が強いことがあげられる。

##### ○『今昔』十七17と『靈驗記』二13

『今昔』十七17	『靈驗記』二13
(1) <u>一心ニ念仏ヲ唱フ</u> 。亦常ニ持齊シテ、日毎ノ晨朝ニ、地蔵菩薩ノ宝号一百八反唱フ。	〈1〉 三時ノ行業、六時ノ礼讃、一座ノ齋食ニテ、 <u>一向ニ地蔵ヲ念ジケリ</u>
(2) 我レハ此レ浄業ニシテ真実ノ行者也。三業	〈2〉 吾ハ是、浄業真言ノ行人ナリ。何ノ

12) 速水侑『地蔵信仰』（塙書房、1975）pp.108-113



<p>六情ニ於テ犯ス所無シ。昔シ、雄俊ト言シ者ハ極悪邪見ノ人也キ。然レドモ、命終ル時、念仏ノ力ニ依テ、地獄ノ猛火忽ニ変ジテ、清涼ノ風吹テ、即チ仏ノ迎接ヲ預テ、極樂世界ニ往生スル事ヲ得テキ。<u>我レ念仏ヲ唱へ、地蔵菩薩ノ悲願ヲ憑ム。豈ニ此レ空カラムヤ。</u></p>	<p>罪アリテ角ハ行ヒケルゾ。昔、雄俊ハ極悪無道ノ犯人ニシテ、七度還俗シタリシスラ、最後ノ一念ノ称名ニ依、衆罪惡無道ノ犯人ニシテ、七度還俗シタリシスラ、最後ノ一念ノ称名ニ依、衆罪如霜露消、無間ノ炎變シテ清涼ノ風涼ク吹テ、速ニ往生淨土ノ素懷ヲ遂。<u>一向地蔵菩薩ヲ念ズル専修ノ行人ナリ。</u>争テ吾ヲ呵責セン</p>
<p>(3) 蔵満遂二年九十二満テ、身ニ病無ク、行歩輕クシテ、命終ル時ニ臨デ、兼テ其ノ期ヲ知テ、<u>念仏ヲ唱へ、地蔵菩薩ヲ念ジ奉テ、西ニ向テ端坐シテ、掌ヲ合セテ入滅シンケリ。</u></p>	<p>〈3〉 弥々勇猛精進ニシテ菩薩ヲ念ジ、年齢九十三ニシテ唱滅侍ル。紫雲埋山、異香満室。</p>
<p>ナシ</p>	<p>〈4〉 サレバ、彼ノ經ノ中ニ、寿命長遠ノ福ヲ得ベシト。誠哉、如来ノ金口不徒然。今ノ蔵満ガ事、即是ナリ。誠ニ、今世・<u>後世能引導ス。</u>難有悲願ナリ。</p>

蔵満が相人登昭に短命を予言され、若くして一度死んだが、地蔵信仰によって蘇生した話である。『今昔』には阿弥陀浄土信仰と地蔵信仰の兼修が見受けられる。

『今昔』には、(1)の「一心ニ念仏ヲ唱フ」、(2)の「我レ念仏ヲ唱へ」、(3)の「念仏ヲ唱へ」とあって、地蔵信仰と並びに阿弥陀浄土信仰と関連する平素・臨終の修行が行われている。特に、(3)の往生に関する記述は、当時の阿弥陀信仰に基づく往生伝のそれと全く一致しており、阿弥陀の西方浄土に生まれるべく、阿弥陀「念仏」がクローズアップされる。蔵満の脱地獄の理由としては平素の阿弥陀信仰と地蔵信仰が取り上げられているが、～勿論地獄から墮地獄者を救ってくれる役割は阿弥陀ではなく、専ら地蔵に託されている～(3)の往生に関しては地蔵信仰の功德は問われない。一方、『靈驗記』には上記の阿弥陀関連記述がことごとく省略されており、蔵満は「一向地蔵菩薩ヲ念ズル専修ノ行人」であって、〈3〉の浄土においてさえ専ら地蔵菩薩を念じたと見える。〈4〉の「後世能引導ス」の記述は蔵満の浄土往生を指していることは言うまでもない。卷十七19の地蔵が墮地獄者に「大悲ノ誓願ニ依テ、片時モ惡趣ノ辺ヲ□□□ズシテ善惡ヲ定ムル間、殆淨仏国土ノ菩薩ノ功德莊嚴ヲモ忘レヌベシ。」と語るように、平安時代末期の『今昔』には地蔵の専門は地獄からの救済であって、往生の事に関してはいっこうに関わることが無かったことを考慮に入ると、〈4〉の「後世能引導ス」の記述は注目に値する。<sup>13)</sup>

13) 地獄関連話ではないが、阿弥陀信仰関連記述が削除される例として以下の『今昔』十七10と『靈驗記』一7がある。

清水邦彦は、『靈驗記』には阿弥陀念仏兼修は見なれないことに着目して、実睿編の地蔵菩薩靈驗記にはそもそも阿弥陀念仏の記事がなかった、これは『今昔』の編者が付加したものであろうと推測している。14)しかし、『今昔』の編者が意図をもって阿弥陀念仏の記事を付加したという必然性はほとんどない。当時の宗教的状况から見ると、地蔵・阿弥陀兼修は後述するように、ごく自然である。阿弥陀念仏の記述は元来実睿編の地蔵菩薩靈驗記にあって、それが『靈驗記』に収録される過程で排除されたと見るのが妥当であろう。

次は、『今昔』の法華経関連記述が、『靈驗記』においては省かれる場合である。

【例1】『今昔』十七19と『靈驗記』六5

『今昔』十七19	『靈驗記』六5
(1)而ルニ、生タリツル時、 <b>法花経ヲ読誦シ、観音地蔵ニ懃仕リツヽ、□□□「必ズ此ノ度ノ我レヲ助ケ給ヘ」ト穴ニ落入ル間</b>	<1> ナシ
(2)ナシ	<2> 静照人付テ、後に人集ツテ冥土ノ事を問フニ、偏ニ地蔵菩薩ノ御助ノサマヲ、具ニ語テ泣ニケリ。

【例2】『今昔』十七21と『靈驗記』二乙

『今昔』十七21	『靈驗記』二乙
大仏師定朝ヲ語テ、等身ノ皆金色ノ地蔵菩薩ノ像ヲ一体造リ奉リ、 <b>色紙ノ法華経一部ヲ書写シテ</b> 六波羅蜜寺ニシテ、大キニ法会ヲ行テ供□養シ奉リツ。	急ギ大仏師定朝ヲ請ジテ、等身ノ地蔵菩薩ノ像ヲ金色ニ彩色造立シテ供養ヲ成シ、 <b>十輪経等ヲ書写シ奉リ</b> 、六波羅蜜寺ニ就テ開眼ヲ行ケルトゾ。

【例3】『今昔』十七27と『靈驗記』六4

『今昔』十七27	『靈驗記』六4
其ノ後、忽ニ仏師ヲ語テ、三尺ノ地蔵菩薩ノ像ヲ一体造リ奉リ、法花経三部ヲ書写シテ、	仏工ヲ請ジテ御長三尺ノ地蔵菩薩ヲ造立シ奉リテ、件ノ鏡ヲ相副、亭子院ニ就テ供養シ

『今昔』十七10	『靈驗記』一7
仁康既ニ年八十二及テ、命終ル時、心不違ズシテ、西ニ向テ直ク居テ、阿弥陀仏並ニ地蔵菩薩ノ名号ヲ唱テ、眠ルガ如クシテ失ニケリ。	ナシ

14)清水邦彦は「現存本『地蔵菩薩靈驗記』について」（『日本文化研究』、筑波大学、1995）

亭子ノ院ノ堂ニシテ、法会ヲ儲テ供養シ奉リツ。	奉ル。
------------------------	-----

【例1】の『今昔』(1)は三井寺の浄照が地獄に落ちながら、救済を平素信仰していた法華経・観音・地蔵の功德を祈る場面である。ちなみに、観音の教えは、『法華経』観世音菩薩普門品によるものであって、観音信仰と法華信仰は軸を同じにする。一方、『靈驗記』〈1〉には『今昔』と関連する記述はなく、〈2〉で墮地獄の救済の功德が地蔵にのみ求められている。

【例2】は源国挙が地獄から蘇生してから六波羅蜜寺で法華経を書写し、地蔵仏像を造って法会を行ったという内容である。六波羅蜜寺は市聖の空也が平安時代中期の951年に造立した十一面観音を本尊とする道場に由来し、空也の死後、977年に比叡山の僧・中信が中興して天台別院とし、それ以降天台宗に属した。平安時代に、当寺が天台宗に属している点、法会を行っている源国挙の本人が実際、比叡山の根本中堂で千部の法華経供養をしている(『小右記』長和三年十月十七日・二十一日)点などを念頭に入ると、『今昔』における「色紙ノ法華経一部ヲ書写」したという記述は事実に近いだろう。一方、法華経関連記述は『靈驗記』には見えず、その代わり、十輪経などが書写されたと語られる。周知のように、十輪経、即ち、「大乘大集地蔵十輪経」は「地蔵菩薩本願経」(本願経)、「占察善悪業報経」(占察経)と共に「地蔵三経」と呼ばれる地蔵信仰の典拠とされた経典である。天台宗に属していた六波羅蜜寺が、以後、桃山時代に真言宗智積院の末寺となったことも念頭に入れるべきであろう。

【例3】の場合、『今昔』の「法華経三部」書写の功德が『靈驗記』では排除されて、あらたに「女の平素使っていた鏡」が供養されたと改変されている。

『今昔』の地獄関連地蔵説話に阿弥陀信仰と法華経の功德がよく出ている理由は、地蔵信仰の来世的傾向は、源信を中心とする念仏結社運動が昂揚する十世紀後半になって明確になったこと、高橋貢が指摘するように、これらの説話が成立した背景には横川の天台浄土教の影響があること、<sup>15)</sup>日本天台の往生思想が、法華経による一切成仏の思想を根本とし、法華信仰と阿弥陀信仰は一体一味の関係にあった点などが挙げられる。

では、なぜ『靈驗記』では、地蔵専修の傾向が強くなったのであろうか。<sup>16)</sup>平安時代までの旧仏教による地蔵信仰は、宗派の拠所とする一つの思想・修行だけを強調する鎌

15) 高橋貢『中古説話文学研究序説』(桜楓社、1974) pp115-127。一方、田中久夫氏は『今昔』の地蔵説話に修験的な色彩が強い指摘しているが、平安時代の浄土教と密教はよく関わり合っていたので、浄土系と修験系がこごして混じって登場することにあまり不思議はない。『地蔵信仰と民俗』(木耳社、1989)

16) 以下の鎌倉以後の地蔵信仰の歴史については、速水侑『観音・地蔵・不動』(講談社現代新書、1996)の内容を参照。

倉時代の新仏教（浄土宗、浄土真宗、日蓮宗、禅宗など）により否定されるようになった。専修念仏の人々の間では、地蔵像を引きずり下ろす、頭をすりつぶすこともあった。法然浄土教の確立によって来世信仰としての役割を狭められた地蔵は、看病の地蔵・田植の地蔵・將軍地蔵などの名から分かるように、阿弥陀にまさる現世利益の部分表面化することで、発展する。ところが、六十年におよぶ南北朝の動乱以後、寺社勢力は経済基盤である所領が守護や武士に脅かされるなど、前代と比べて顕著に勢力が弱くなった。南北朝から室町時代の教団・大寺社はその打開策として底辺拡大＝民衆化を図ることになり、具体的には仏教諸派の葬式仏教化と密教化である。葬送の民族を仏教儀礼として再編成し、それを中核として寺檀関係を固めるという方法で、民衆を包摂した。一方、鎌倉新仏教諸派は民衆の現世利益の欲求に応える形で急速に密教化した。民衆に葬送追善を勧めるために、僧たちが好んで利用したのは、民衆の素朴な冥界へも恐怖であり、特に後述する十王信仰であった。阿弥陀専修の成立によって浄土信仰としての役割がせばめられたかにみえた地蔵は、こうした仏教の民間浸透の過程で現世利益的面に加えて、地獄の支配者として新たにクローズアップされることになった。以上の鎌倉以後から近世にかけての地蔵信仰の変遷を念頭に入れると、『靈驗記』の地蔵専修は、葬式仏教の成立の過程で地獄の支配者として新たにクローズアップされた地蔵信仰の産物であったといえよう。

最後に、『今昔』と『靈驗記』の両書の相違点として地獄観の変化が挙げられる。

【例1】『今昔』十七27と『靈驗記』六4

『今昔』十七27	『靈驗記』六4
<p>(1)今ノ地蔵菩薩此ノ地獄ニ来リ給テ、<u>日夜三時ニ我ガ苦ニ代リ給フ</u>。願クハ、聖人彼ノ我ガ本ノ家ニ行テ、父母兄弟ニ此ノ事ヲ告テ、我ガ為ニ善根ヲ令修テ、我ガ苦ヲ抜き給へ。</p>	<p>地蔵ノ讚歎ヲ聴聞スル功德ニヨリ、薩埵、毎日三度来臨シ玉フテ、我ガ三苦ニ代玉フナリ。一、猛火ノ為焼テ、身骨皆一段ノ黒炭成、二、刀山ニ登下テ、劍樹身肉ヲ破ラレテ塵如シ。三、鉄杖ニテ鬼ニ打ル、事三百六十、身肉俱ニクダカレテ灰ノ如シ。其外受苦、言語ニ尽ガタシ。我、故卿ニ在生ノ時、朝夕容顏ヲツクロフ鏡アリ。今、妹是ヲ所持ス。是ヲ取テ、地蔵菩薩ニ供ジ奉リ修福追善ノ功ヲ作シ、我ガ如此苦患ヲ救給ハゞ、誠ニ大利ナルベシ」ト云々</p>

本話は延好という修行僧が立山地獄に墮ちた女性の依頼を受け、女性の生家を尋ね

彼女のための追善を行わせたという筋であり、17)上記の記述は女性が地藏講にちょっと顔を出しただけでも地藏が地獄の苦しみを引き受けてくれるという内容である。注目したいのは、『今昔』ではただ「三度」地藏が身代わりするという記述が、『靈驗記』では三つもの地獄の責苦が生き生きと描かれていることである。いわゆる「身代わり地藏」の一形態として地獄抜苦の功德が強調されると同時に、地獄に関する具体的な知識と認識が窺える。

【例2】『今昔』十七18と『靈驗記』一 8

『今昔』十七18	『靈驗記』一 8
<p>(1)即チ門楼ニ至ル。其ノ内ニ器量キ屋共有リ。此ヲ見ルニ、檢非違ノ庁ニ似タリ。其ノ所ニ官人其ノ数有テ、庭ノ中ニ着並タリ。多ノ人ヲ召シ集メテ、其ノ罪ノ軽重ヲ定ム。亦、多ノ人ヲ捕ヘテ縛テ獄ヘ遣る。其ノ泣キ叫ブ音、雷ノ響ノ如シ。</p>	<p>①巍々タル楼門アリテ、大ナル官舎アリ。大殿ノ左右ニ各一舎アリ。左ノ一舎ハ、秤量ヲ置テ亡人ノ罪業ノ軽重品ヲ懸ク。右ニ一舎アリ。亡人ノ姓名、死生ノ定数ヲ勘テ筆録ス。②又殿ノ左リ、秤量舎ノ前ニ高台アリテ、台ノ上ニ台上ニ秤量幢アリ。以テ舎中ノ備ヲ標幟ス。今此ノ官舎台ハ、有情ノ業感所成ノ所ナリ。③次ニ鏡台アリ。浄玻璃鏡ノ影ヲ移シテ一生ノ作業明々トシテ見ヘタリ。角シテ、阿訪・羅刹、罪人ヲ取テ秤ノ盤ノ上ニ置、罪ヲ定ントス。罪人陳ズルニ処ナク、顔色ヲ移シ変ル。秤ノ量分明カニ、過罪免ルベカラズ。④羅刹即チ罪人ヲ取下シテ、勘録舎ニ伝ヘ送ル。此ノ官舎ハ、大殿ノ右ノ方ナリ。此ノ舎ニ於テ、俱生神及五道大神等ノ簿ヲ開テ、悉ク因果ヲ考定ム。其々ニ地獄ノ苦ヲ受ルニ究、泣哀ム声ハ太山モ崩ルバカリ。</p>

本話は阿清という僧が病死して地獄に落ちたが、地藏が現れ地獄の官人に弁明してくれたので蘇生したという筋で、上記の記述は阿清が目にした地獄の模様である。

『今昔』と比べて『靈驗記』には秤量舎、浄玻璃鏡、勘録舎、羅刹、閻魔王など地獄の描写がとても詳しい。『靈驗記』が引用している経典は『宝積経』『華嚴経』『十輪経』など実睿編の『原撰本靈驗記』成立以前から存在しているものもあるが、

17)この話は後に立山地獄縁起絵巻として、絵巻物に描かれる。謡曲の『善知鳥』は、陸奥国の外ヶ浜の獵師が、生前に善知鳥を殺した罪によって、死後立山の地獄におちて、化鳥に苦しめられるという内容であり、江戸時代の戯曲『善知鳥安方忠義伝』も、立山地獄におちたという陸奥の国の獵師を、テーマとするものである。この類の説話は当時の江戸の人々にもだいたい馴染んでいたものであろう。

『延命地蔵菩薩經』『地蔵菩薩発心因縁十王經』(=『地蔵十王經』)など鎌倉時代以後に日本で成立した偽経もある。上記の『靈驗記』の記述は主に『地蔵十王經』五官王宮の記述に基づいており、18)地獄観念が平安時代以後、より具体化になったことを示す。仏教が中国で道教と習合して偽経の『閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土經』(『預修十王生七經』)が作られ、晩唐の時期に十王信仰が成立した。十王が順番に死者を審理し、転生の行き先を決め、審理は七日毎に通常は七回、決まらないときに三回追加になっている。そして、日本で作られた偽経『地蔵十王經』が平安末期に末法思想と冥界思想と共に広く浸透したが、その『地蔵十王經』には、三途の川・賽の河原・奪衣婆・懸衣翁等が登場する。『靈驗記』二3には三途の川の描写が詳しいが、これまた『地蔵十王經』の影響であるのである。鎌倉新仏教諸派が民衆に葬送追善を勧めるために、僧たちが好んで利用したのは十王信仰であったことについては前述の通りである。『地蔵十王經』は、十段にわけて十王の各々の裁判を記述しているが、もっとも多い紙面を割愛しているのは五番目の閻魔王であり、閻魔王の地獄から人々を救うのは六地蔵など地蔵菩薩にほかならないという。地蔵は鎌倉以後現世利益だけではなく、このように追善供養を強調する葬式仏教の確立によって来世的地獄抜苦の菩薩として確固たる位置を占め続けることができたのである。

## 5. 結論

本稿は日本の地獄説話の研究における一連の作業の一つとして、『今昔』巻十七に所収された地蔵関連地獄説話の特徴を明らかにし、また、後代に成立した『靈驗記』の同話との比較を通じて地獄観の変遷の一端を考察した。考察の結果を記すと以下になる。

『日本靈異記』には多数の地獄蘇生譚が収録されているにも関わらず、地蔵が登場するのは下9のみであり、平安末期の地蔵信仰にみられるような地獄抜苦の性格は見受けられない。悲観的来世的な信仰が未発達で、現世利益信仰が強く、来世の六道輪廻の恐怖がそれほど深まっていなかった当時において、初期地蔵信仰の性格を窺わせる話と

18)『地蔵十王經』「第四五官王宮」における『靈驗記』の該当記述を以下に記す。①三江の間に於いて官庁を建立す。大殿の左右に各一舎有り。左は秤量舎、右は勘録舎なり。②左に高台有り。台の上に秤量幢有り。業匠の巧みにして、七の秤量を懸け、身口の七罪を量り、軽重を紀すことを為す。③意業の所作は秤量に懸けず。次に鏡台に至って当に鏡の影を見るべし。……爾の時に訪羅、罪人を取へて秤の盤上に置くに、秤目故の如し。亡人口を閉づ。造悪のものは面を変ず。④訪羅之を下して勘録舎に伝ふ。赤紫の冥官秤書に合点し、光禄司侯、印を録張に押し、具に憲章に載せて閻魔宮に奏す。爾の時に天尊、是の偈を説きて言く、五官業秤 空に向かつて掛り、左右の双童の業の薄全し。軽重豈情の願ふ所に由らんや。低昂は自ら昔の因縁に任ず。双童子形(壯++)の偈に曰く、善を証明せる童子は……悪を証明せる童子は……

して注目に値する。

考察の対象となった『今昔』の地蔵関連地獄説話は、『今昔』十七の計32話中、地獄と関連する14話である。なぜこのような地獄抜苦の地蔵信仰が、この時代、具体的に現れたのであろうか。律令体制が崩れてくると、没落する貴族も多くなり、宿世観や無常観、六道輪廻の思想がなじんできた。私的な来世の救いをテーマとする浄土思想の興隆と相まって、地蔵信仰は来世的性格を強めることになったのである。まず、話型に関してであるが、地獄蘇生譚が計12話、地獄巡礼譚が計2話となっており、先行説話集のそれとほとんど変わらない。一方、モチーフの内容において、注目すべき二、三点の変化も見受けられる。第一に、先行する説話集では、地獄の位置が現世と連続的な空間として捉えられる、すなわち、水平他界観が多かったが、『今昔』では、地獄の所在を地下に求める話が見える。日本説話文学の中で地獄を垂直的空間に捉えたもっとも早い例として注目に値する。第二に、先行する説話集では、閻魔王が裁判官としての権威が強調されるが、地蔵説話ではその権威が薄れ、専ら地蔵の地獄抜苦の功德が強調される。地蔵信仰における地獄抜苦の功德がどれほどこの時代に強調されたかが分かる。第三に、先行する説話集では、墮地獄の理由が比較的明記されているが、地蔵説話では墮地獄の理由が不分明であるか、あるいは善業を積んだ人さえも地獄に墮ちる場合が多い。前の時代と『今昔』の時代では「輪廻」や「来世」に対する考え方が変わってきたことを示す。すなわち、「今昔物語」の地蔵説話の地獄観では、人びとは現世の善悪によってではなく前世の業縁により、あらかじめ定められた運命として地獄に召されるのであり、もはや宿命であると考えられた。「地獄は必定」という意識が生まれたのである。この「地獄は必定」という意識は、浄土教の諸業往生思想のもとで、諸業往生のすべなき下層民衆において強かった。

続けて、『今昔』と『靈驗記』の両書の相違点に関してである。まず、『靈驗記』の方が『今昔』より地蔵専修の性格が強いことが挙げられる。たとえば、『今昔』における阿弥陀関連記述や法華信仰関連記述が、『靈驗記』にはことごとく省略されており、地蔵のみ強調されたり、地蔵関連経典に置き換えられる。『今昔』に阿弥陀信仰と法華経の功德がよく出ている理由は、地蔵信仰の来世的傾向は、源信を中心とする念仏結社運動が昂揚する十世紀後半になって明確になったこと、地蔵関連地獄説話の成立に横川の天台浄土教が深く関わっていること、日本天台の往生思想が、法華経による一切成仏の思想を根本とし、法華信仰と阿弥陀信仰は一体一味の関係にあった点などが挙げられる。一方、『靈驗記』の地蔵専修は、地蔵が鎌倉以後、葬式仏教の成立の過程で地獄の支配者として、また来世的な地獄抜苦の菩薩として確固たる位置になった結果であろう。最後に、両書の相違点として地獄観の変化が挙げられる。『靈驗記』が引用している経典は『原撰本靈驗記』成立以前から存在しているものもあるが、『地蔵十王経』のように平安末期、鎌倉時代以後に日本で成立した偽経もある。『地蔵十王経』には十王

思想と共に日本化した多様な地獄のモチーフが新たに登場しており、『靈驗記』の内容に豊富な題材を提供している。

## 【参考文献】

- 李市峻 「『今昔物語集』における『冥報記』の受容の方法～編者の構想と出典との齟齬を中心にして～」 (『日本文化学報第12輯』、韓国日本文化学会、2002・2)、 「『日本靈異記』の冥界観」 (『日語日文学研究』、韓国日語日文学会、2003・11)、 「『十四卷本 地藏菩薩靈驗記』의 설화전승의 방법에 대한 연구～『今昔物語集』와의 비교를 통해서～」 (『日本文化研究 第28輯』 동아시아일본학회、2008・10)
- 井上光貞ほか (校訂) 『日本思想大系七 往生伝 法華驗記』 (岩波書店、1974)
- 岩本裕 『地獄と極楽』 (三一書房、1965)
- 榎本千賀 [ほか]編著 『一四卷本地蔵菩薩靈驗記上』 (三弥井書店、2002)  
『一四卷本地蔵菩薩靈驗記 下』 (三弥井書店、2003)
- 片寄正義 『今昔物語集論』 (三省堂、1942)
- 川村邦光 『地獄めぐり』 (筑摩新書、2000)
- 木村清孝 「『延命地藏経』の成立—その思想背景をめぐって—」 (『日本仏教文化論叢 上巻』、永田文昌堂、1998)
- 小松茂美 『続日本絵巻大成12山王靈驗記・地藏菩薩靈驗記』 (中央公論社、1984)
- 清水邦彦 「現存本『地藏菩薩靈驗記』について」 (『筑波大学日本文化研究』、1995)
- 杉岡厚誌 「『日本靈異記』における地獄説話と地藏」 (『仏教民俗研究 4』 1977)
- 高橋貢 『中古説話文学研究序説』 (桜楓社、1974)
- 田中久夫 「地藏信仰の伝播者の問題—『沙石集』『今昔物語集』の世界—」、 (『日本民俗学 82』 1973)
- 速水侑 『講談社現代新書 観音・地藏・不動』、1996
- 真鍋広済 『古典文庫二〇一 地藏菩薩靈驗記 一』、1964



## 要 旨

本稿は『今昔』巻十七に所収された地蔵関連地獄説話の特徴を明らかにし、また、後代に成立した『靈驗記』の同話との比較を通じて地獄観の変遷の一端を考察したものである。

考察の対象となった『今昔』の地蔵関連地獄説話は、『今昔』十七の計32話中、地獄と関連する14話である。まず、話型に関してであるが、地獄蘇生譚が計12話、地獄巡礼譚が計2話となっており、先行説話集のそれとほとんど変わらない。一方、モチーフの内容において、注目すべき二、三点の変化も見受けられる。第一に、先行する説話集では、地獄の位置が現世と連続的な空間として捉えられる、第二に、先行する説話集では、閻魔王が裁判官としての権威が強調されるが、地蔵説話ではその権威が薄れ、専ら地蔵の地獄抜苦の功德が強調される。第三に、先行する説話集では、墮地獄の理由が比較的明記されているが、地蔵説話では墮地獄の理由が不分明であるか、あるいは善業を積んだ人さえも地獄に墮ちる場合が多い。

『今昔』と『靈驗記』の両書の相違点については、『靈驗記』の方が『今昔』より地蔵専修の性格が強いこと、地獄観の変化があったことなどが挙げられる。

キーワード：日本説話、地蔵菩薩、十四卷本 地蔵菩薩靈驗記、『今昔物語集』、  
Folk tale of Japan、Ksitigarbha Bodhisattva、  
Jizoboatsu-reigenn-ki、Konzaku-monogatari-shu

투 고 : 2008. 11. 30  
1차 심사 : 2008. 12. 13  
2차 심사 : 2008. 12. 27